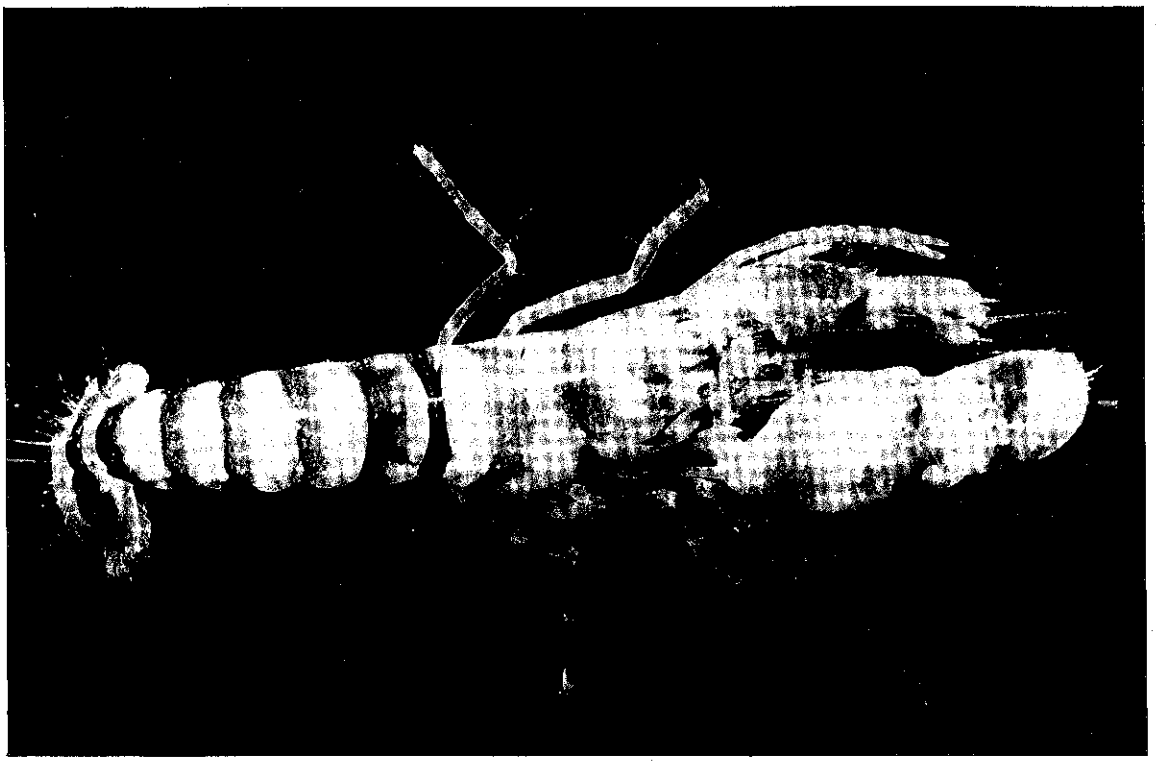
ISSN 1341-6928

串本海中公園 マリンパビリオン

1998. 1. Vol. 27, No. 1



ウデワテッポウエビ（仮称）
***Alpheus* sp.**

テッポウエビ属エドワールテッポウエビ群に属する。潮間帯の潮下帯に生息する小型種で、体長は最大でも20mmに満たない。体の背面には明暗の鮮やかな横帯模様があり、同様の模様が第1胸脚鉗部にもみられる（仮称和名の由来）。大鉗掌部上下両縁の肩は丸く、上縁の肩の先端はわずかに前方に突出する。小鉗は雄のみ毛冠を持つ。本種の形態は先月号に紹介したフタゴテッポウエビに似るが、本種の第1鉗脚にみられる暗色の帯状模様は後者にはないこと、本種の第3胸脚指節は平坦にならないのに対し、後者のそれは亜へら状を呈することで区別される。手元には串本及び沖縄ケラマ群島の標本がある。写真の個体は串本町錆浦海岸、潮間帯転石下より採集された体長約15mmの雄。テッポウエビ科。 K. N.

串本海中公園センター

クモヒトデ駆除の達人

森 美枝

当館の展示水槽中には展示を目的とした生物以外に様々な生物が繁殖している。特にヤギ類・ツノサンゴ類の展示水槽では、餌として冷凍アミのジュースをひんぱんに流し込んでいるせいか（本誌 Vol. 25, pp. 14–15）、カイメン類やセイタカイソギンチャク、ニホンウミケムシ、ヨコエビ類など他の水槽に比べて多くの生物が繁殖する。これらの生物は飼育上役に立つ種もあるが、悪影響を及ぼす種も少なくない。その一つが、ヤギ類の枝部分に付着して生活する、盤径が5mm程のニシキクモヒトデという小型のクモヒトデである。野外で採集したヤギ類についていたものが水槽内で繁殖したと思われるが、これが大量に繁殖すると、水槽中のヤギ類にびっしりとからみつき、見た目に気持ち悪いのはもちろん、からみつかれたヤギ類はポリプを出せなくなってしまう。ブラシでこすり落としたり、サイフォンで吸い出すなど、いろいろ駆除を試してみたが、6本（普通クモヒトデ類の腕は5本だが、本種は6本）の長い腕でしっかりとヤギの体に巻きついているため、簡単にはがれるものではない。昨年秋このニシキクモヒトデの大量発生にみまわれ、有効な駆除法はないものかと頭を悩ませていた。

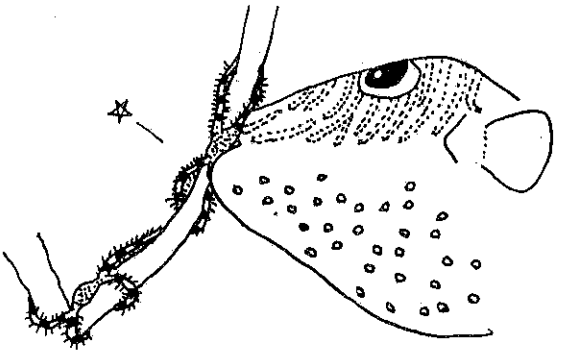
11月半ば頃、キタマクラがクモヒトデ類を食べる、との話を聞いた。情報は山と渓谷社出版の『日本の海水魚』という図鑑に載っていたもので、キタマクラは雑食性で海藻、貝類、カニ類、クモヒトデ類などを食べる、ということであった。当館では、以前から水槽内に繁殖するセイタカイソギンチャクの駆除に、ソメンヤドカリやチョウチョウウオなどを入れて食べさせる、生物的駆除方法を取り入れ（本誌 Vol. 14, pp. 58–59, Vol. 24, p. 2）、効果が得られている。そこで、今回キタマクラによるクモヒトデ駆除作戦を試みることにした。

ニシキクモヒトデが大量に繁殖するヤギ類・ツノサンゴ類の水槽は水量3.3t、アカヤギ類、ムチヤギ類、カラマツ類など合わせて12種26点が展示されている（本誌 Vol. 25, p. 81）。その中に体長10cmのキタマクラを2匹入れて様子を見ることにした。

結果を先に述べれば、効果はてきめんだった。キタマクラは、入れた翌日にはクモヒトデを食べ始め、日を追うごとにその旺盛な食欲を発揮し、次々とヤギの枝にからまったクモヒトデをかじり取っていった。その食べっぷりがあまりにも大胆なので、ヤギの体までかじっているのではないかと思ったが、予想に反してヤギ類への損傷は見られなかった。クモヒトデの呪縛から解放されたヤギ達は、生気を取り戻したように再びポリプをのばし始めた。2週間後水槽中のヤギ全部にびっしりからみついていたクモヒトデは約1／3に減り、1ヶ月後にはほとんど見られなくなっていた。

クモヒトデ類を食べるとされるフグの仲間は、他にもサザナミフグやキンチャクフグ類などがあり、これらの種についても同じ様な効果が出るのか調べてみたいと思っている。しかし、これらフグの仲間に比べてもキタマクラの利点は、温帯域の沿岸でごく普通に見られ、何と言っても釣り糸を垂らせば簡単に釣れて手に入りやすい、ということである。

今まで、「餌取り」などと嫌われることがあっても、特に取り得もないと思われてきたキタマクラであるが、今回の試みでクモヒトデ駆除の達人（達魚？）としての思いがけない才能に注目させられることとなった。



雌タイマイの死体漂着

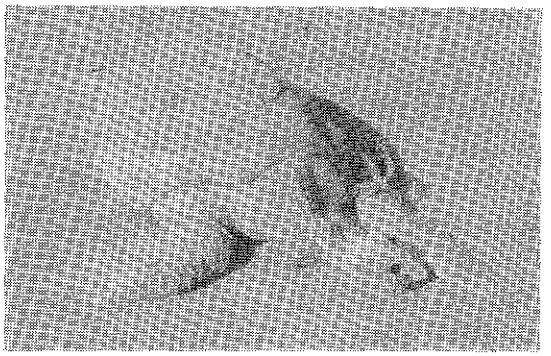
宮脇 逸朗

昨年の11月7日、串本町の西海岸に位置する通称上浦の浜に大柄なタイマイの死体が漂着した。腐敗による損壊があまり進んでいないこの死体を測定したところ、直最小甲長が78.7cmもある立派な雌個体であった。

タイマイは熱帯や亜熱帯などのサンゴ礁海域に主に分布するウミガメで、串本町はもとより近隣海域での出現は非常に少ない。本来の棲息域から遠く離れた高緯度の串本町海域では、イセエビ漁の刺網や定置網などで稀に捕獲されることがあり、一応その姿を見ることができるが、このような本土域での出現個体については通常の棲息域から迷い込んだ『迷入個体』と考えられている（内田, 1979）。

当町海域において確認された『迷入個体』の記録は、1971年以後1991年までの間には、直最小甲長が33.0cm～56.4cmまでの個体を中心に最大値で60.5cmまでの15頭が確認されている。また、本種のこれまでの出現個体はその全部が未成個体で占められている。

今回の個体は当町海域では未確認の雌成体であったが、記録上の取扱については同個体が死亡地不明の漂着個体であることで、残念ながら串本町における正式な出現記録にはならない。しかしながら、腐敗が大きく進んでいないことから死亡地が近隣とも推測され、今後の当町海域での成体の出現の可能性を期待させる。



（写真提供：串本土木事務所）

“頑張れ阪神タイガース『トラ』にちなんだ魚大集合”展 開催のご案内

今春、当センターでは表記の特別展を開催する予定です。

この特別展では、寅年・阪神タイガースにちなみ、『トラの名前にちなんだ魚』『タイガースカラーの魚』などを展示すると共に、タイガースキャラクターグッズの販売なども行います。また、春休み期間中の3月27日（金）には、阪神タイガースのマスコット『トラッキー』と『ラッキー』が来館し、イベントを盛り上げます。さらに、「裏方ガイドツアー（普段は見られない水族館の裏側をガイド、さらに飼育係を体験できる）」「海の生き物クイズラリー」「子供写生大会」などのイベントも随時開催し、来園者の皆さまに楽しんでいただく予定です。なお詳細については次の通りです。

期間：平成10年3月21日（土）～5月5日（月）
場所：串本海中公園マリンパビリオン内
主催：串本海中公園センター
後援：串本町・串本町観光協会
開館時間：午前9時～午後4時30分
（ただし入場は午後４時まで）
休館日：なし
入館料：平常料金｛海中公園券大人1,050円、小人（小、中学生）650円、幼児200円｝
交通：JR串本駅下車 13分

なおイベントについてはそれぞれ開催期日や募集定員が異なっておりますので、詳しいことは下記まで直接お問い合わせ下さい。

問い合わせ先：（株）串本海中公園センター
TEL:07356-2-1122
FAX:07356-2-7170

1997年 錆浦定置観測まとめ

宇井 晋介

当館地先で行った1997年の定置観測結果について報告する。グラフの見方は、本誌Vol. 16, p. 2-3を参照していただきたい。また平年値は1974年から1997年までの24年間の平均値を用いた。

《気温》

春先には寒い日と暖かい日がしばらく交互に続いたが、それ以降夏まではほぼ平年並みに推移した。8月から9月はほとんど雨の降らない天候が続き、体感的にはずいぶんと厳しい残暑だったように記憶しているが、数値的には例年となんら差はなかった。9月、10月はやや気温の低い日が続いたが、秋が深まってからは平年並かやや高目の値となった。年平均気温は17.6℃で、対平年値は-0.2℃、やや低目と言える。最高値は28.9℃（8月30日）、最低値は1.0℃（1月22日）であった。

《塩分濃度》

1月中旬より3月中旬くらいまではやや低目の値に終始したが、3月下旬からはほぼ平年値に戻った。しかしながら、値は上下動が激しく不安定であった。全体には、4月以降、値は平年値を上回ることが多く、平年値を下回ったのはわずか数回しかない。年平均塩分濃度は35.1‰で、対平年値は+0.1‰であった。最高値は36.9‰（4月30日、6月19日）、最低値は30.8‰（6月23日）であった。

《水温》

年明けから6月頃までは水温はやや高めに推移し、特に1月から3月の水温は例年より1℃から2℃前後高かった。平年値を下回ったのは、わずかの間であった。8月には一時平年値を超える高い値となったが、その後10月末頃までやや低目に推移した。しかし、12月に入って再び高目に転じた。

年平均水温は21.5℃で対平年値は+0.4℃であった。また年最高値は28.3℃（9月3日、9月4日）で、最低値は15.0℃（2月24日）であった。

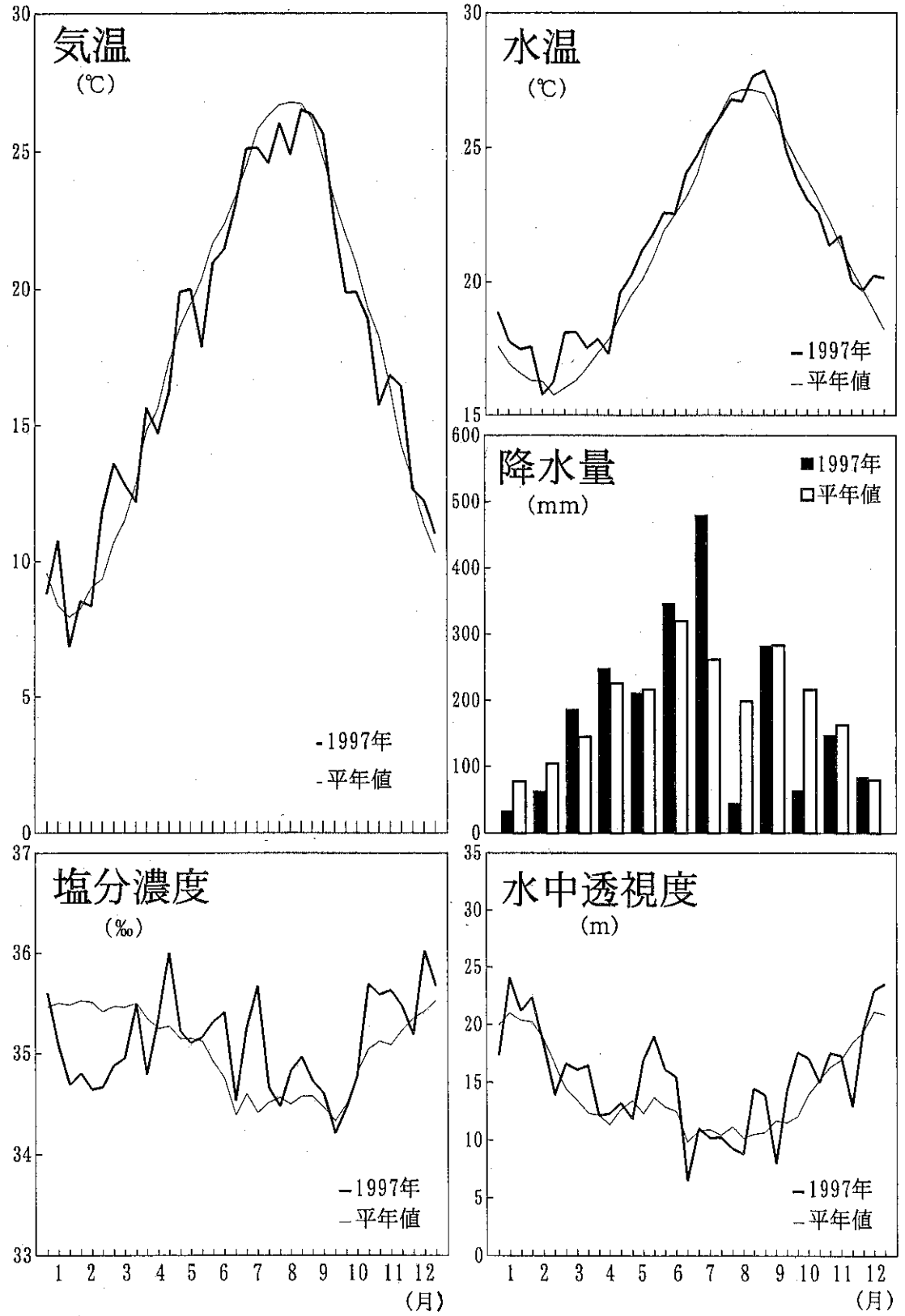
《降水量》

年間総降水量は2189.3㎜、これは平年値と比較すると-277.6㎜で、やや低目となっている。年間を通じて平年値を超えたのは3月、4月、6月、7月、12月の5ヶ月とほぼ半数であったが、特徴的なのは7月の多雨、8月と10月の少雨である。7月は相次ぐ台風の接近で豪雨続きとなり、さらに例年になく太平洋高気圧の勢力が弱く、前線が南下して南岸に停滞した。8月と10月は一転して平年値の4分の1程度の降水量しかなく、特に8月19日から9月7日まで20日近くも全く雨が降らず、カラカラの炎天が続いた。最高値は187.8mm（7月26日）で、これは台風9号が多大な雨をもたらしたためである。

《水中透視度》

水中透視度はやや大きな上下動を繰り返しながら、年間を通じてやや高目に推移した。年間平均値は15.5mで、対平年値は+0.6mであった。最高値は30m（12月14日）であった。

暖冬はすっかり定着した感があり、相変わらずの暖かい冬の海である。これにはもう7年ほども続いている黒潮の接岸も大きな役割を果たしている。太平洋に突きだした潮岬の先端には常に潮が流れているが、この潮は日々その速さや向きを変え、西から東へ奔流となって流れたかと思えば、翌日には逆方向に流れていたりする。ここで下り潮と呼ぶ西から東への流れが強くなると、この錆浦の水温あるいは透視度は急上昇する。西に向かって開けた湾内に向かって黒潮由来の暖かく透明な外海の潮が入り込んでくるからである。それによって運ばれてきた南の海の生き物たちも、暖かい水のお陰で冬を越し、その姿を時折見せてくれる。本誌上でもそうした生き物たちを何度か紹介しているが（本誌 Vol. 26, No. 2, No. 9, No. 11）、今年はそれがことのほか多かったように思う。

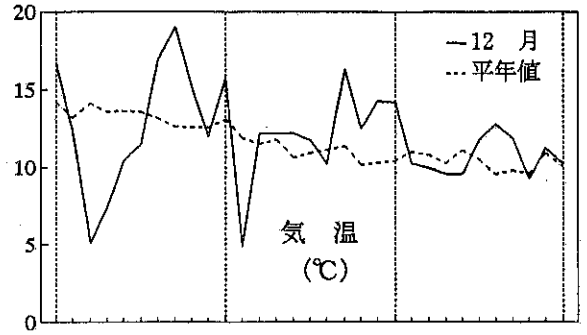

気温
(℃)
-1997年
-平年値
水温
(℃)
-1997年
-平年値
降水量
(mm)
■1997年
□平年値
塩分濃度
(‰)
-1997年
-平年値
水中透視度
(m)
-1997年
-平年値
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
(月)

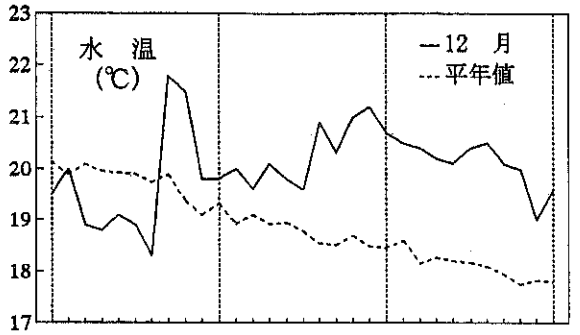
錆浦の海から

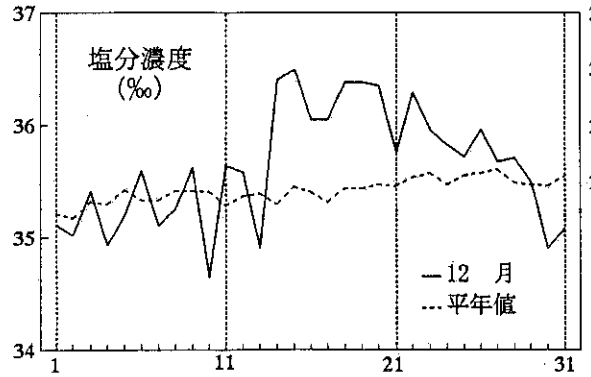
宇井晋介

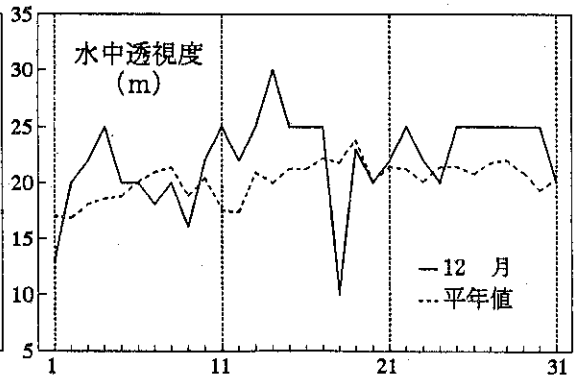
12月平均値	気温　11.9 ℃	水温　20.0 ℃	塩分　35.6 ‰
	透視度 22.1 *m*	月間降水量　83.8 *mm*	

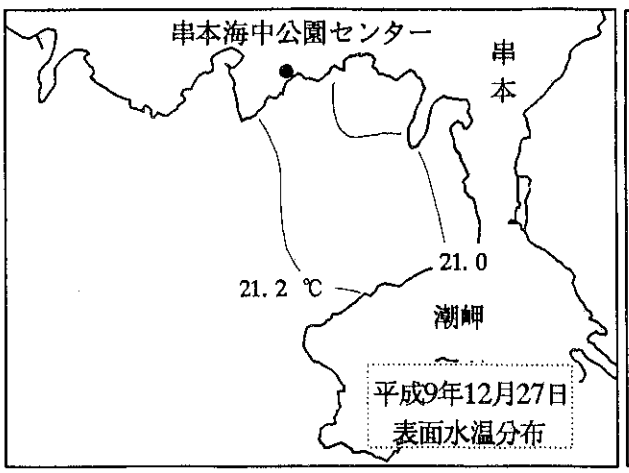
ここ錆浦は、元来暖流の影響でアラメなどの大型藻類は見られない所だが、ホンダワラ類は暖海性のものを中心に多く見られる。ただ、30年ほど前を思い返してみれば、冬になると周辺の入り江は、一見歩けるのではと思うほど今よりも多量にホンダワラの類が生い茂っていた。子供の頃の記憶というものはえてして現実以上に大きくなったり広くなっていたりするものだが、それらを差し引いても、明らかにこうした大型の藻類は減っているように思う。近隣のアラメ場などでも、ここ10年ほど急速な衰退や消滅が伝えられている。藻場が消滅して無節サンゴモ類に置き換わることを「磯焼け」と呼び、原因として栄養塩の少ない黒潮の接岸に起因するものとする説もある。しかし不明な部分も多く、その原因は依然謎に包まれている。ホンダワラ類のクローン育成に成功するなど「苗」を作る技術は昨今急速な進歩を見せているが、肝心の「畑」の方はお寒い限りである。











マリンパビリオン Vol. 27, No. 1 通巻 313号
1部 50円（年間購読料 1,500円）
印刷日　平成 10 年　1 月 20 日
発行日　平成 10 年　1 月 25 日
口座番号：00990-9-41351
口座名称：串本海中公園マリンパビリオン
編集兼発行人
〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
（株）串本海中公園センター
電話　07356（2）4875
FAX　07356（2）7170
印刷所
坂本印刷
串本町串本　Tel: 07356（2）0895